

シリーズ

かほく
市の

文化財 No.23

地域編 長柄用水

日々少しずつ春に近づき、田畑の準備に勤しんでいるかと思われます。今回は、夏粟や長柄町などの田んぼを行う上で重要な「長柄用水」についてみていきます。

「長柄用水」は、大海川の上流（津幡町）から取水し、主に山裾を縫うように巡りながら、大海川よりも標高が高い台地（長柄野）の水田に水を引き込むための用水です。長柄用水ができるまで、長柄野での水田開発は非常に厳しい状況でしたが、櫻井三郎左衛門の子孫であった櫻井平兵衛が中心となり、加賀藩の許可を得て6年の歳月をかけて造り上げ、享保8年（1723）に完成させたといわれています。谷を埋めて造った盛土居（高さ約20

m、長さ90m）や、山を掘り抜いて通したトンネル、可能な限り標高の高い場所へ水を供給するために水路底の勾配をおよそ1/230（230cm進んで1cm下がる勾配）として山裾に水路を通すなど、非常に高度な土木技術と測量技術が駆使されています。

この長柄用水の完成により、大海川よりも標高が高い台地（長柄野）や山間の水田開発を可能としただけでなく、元文5年（1740）に高松新村（現在の長柄町）が誕生した契機にもなりました。長柄用水は、今も地域の人達で大切に管理されています。



長柄野と大海川



長柄用水 箕打トンネル入口